

「被爆者に国境ない」

きょう広島原爆の日 オバマ氏と抱擁・森さん

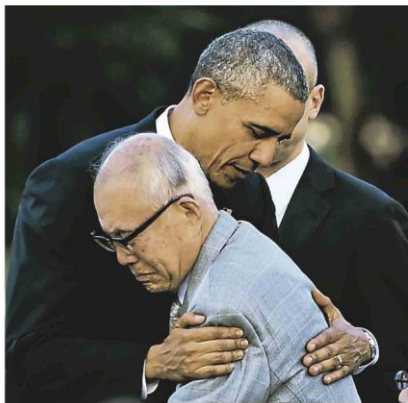
5月、広島を訪れたオバマ米大統領と抱き合った広島市西区の被爆者森重昭さん(79)は特別な思いで被爆から71年の「原爆の日」となる6日を迎える。歴史研究者としての顔を持つ森さんは「ひっそりと死んでいった米兵の無念さを後世

犠牲の米兵捕虜調査40年

「広島で命を落とした米兵の家族を探し当てた男性 5月27日夕、広島を訪れ持ちは自分たちと同じと信 前列で聞いた森さんは目頭



米兵捕虜の調査に協力してくれた戦闘機の機長、トーマス・カートライト氏(故人)の写真を手にする森重昭さん＝広島市西区



演説後、被爆者の森重昭さんを抱き締めるオバマ米大統領＝5月27日(ロイター＝共同)

に伝えたい」と、原爆で亡くなったとみられる米兵捕虜12人の調査に半生を費やしてきた。現職大統領の歴史的訪問が実現した今、「原爆の被害者に国境はない」と訴え、核廃絶への祈りをささげ

が熱くなった。その涙を見ながら、森さんは「あの時、僕は橋の下に吹雪かき飛べた。そばにいた友人2人は亡くなった。避難先の国民学校では、むしろを一日千秋の思いで待たせてくれた」と伝えた。森さんは「早く死んでいった。米兵捕虜の調査を始めたのは約40年前。広島平和記

念資料館に、市民が原爆前後の街を描いた絵が展示されており、橋の柱に縛り付けられた米兵を描いた作品を見つけた。犠牲者の中に捕虜がいたと確信した。会社勤めの傍ら、休日を利用して、過去の新聞記事などの資料を集めたり、市郊外に墜落した戦闘機を目撃者を訪ねたりした。「加害者の犠牲になせよ」との批判も受けた。調査は難航し、「太平洋で一本釣りをしている感覚だった」と苦労を明かす。地道な調査は40年にわたり、爆心地から400m離れた憲兵隊司令部に捕虜が収容され、原爆で亡くなったことを突き止めた。山口県に墜落した米軍戦闘機の機長が原爆投下前に東京へ移送され、無事だったと判明すると、米国の居住地を

調べ、100通以上の手紙をやりとりした。次第に、亡くなった捕虜たちのことが分かってきた。米兵捕虜の遺族には、肉親の最期を知るため森さんを訪ねる人もいた。被爆死した叔父と同じ名前を与えられたおひは、森さんが入手した生前の写真を見つめ続けた。夫の死を絶対に信じない米兵の妻がいることも知らされた。肉親の消息を伝えられない遺族も感じている。

オバマ大統領と抱擁を交わした日以来、国内外から森さんに講演依頼が寄せられている。「ようやく光が当たり始めた被爆米兵の生きざまを通し、原爆の惨状を世界に訴えたい」。森さんは6日、平和記念式典には参加せず、私費で憲兵隊司令部跡に建てた慰霊碑を訪れ、冥福を祈るとい

(御厨尚陽)

ワードBOX
米兵捕虜の被爆 広島市への原爆投下では米兵捕虜も被爆した。爆心地近くに捕虜収容所がなかったこともあり、米国は米兵の被爆死を公式には認めてこなかった。ただ、日本側のさまざまな調査で被爆死した米兵がいたことが明らかとなり、5月に広島を訪れたオバマ米大統領は演説で「(原爆犠牲者には)十数人の米国人捕虜もいた」と言及した。犠牲者数は正確には分かっていないが、森重昭さんの調査によると、広島市郊外などに墜落した戦闘機4機の乗員12人が爆心地近くの憲兵隊司令部に連行され、その後、原爆に遭ったとされる。